

記録のススメ

実験を行う上で、記録はとにかく重要である。実験条件が分からなくては、後で再現しようにも出来ないし、取得したデータを解釈する上でも差し障る。生体信号そのものは自動的にコンピュータに記録されるが、実験中に気づいたこと・感じたことは何も後には残らない。そして実は、これらこそレポートに考察として記述できる格好の材料なのである。

その場で解析まで進めてまとめてしまえば良いと思うかもしれないが、人間はミスをし、そして忘れ続ける生き物である。いざレポートを書く段になって（あるいは提出しようとして）、何か矛盾や違和感を感じても、記録が残っていなければ解析し直すことも、釈明もしようがない。

従って、自動記録されるデータとは別に、適切に記録を残すべきである。例えば実験条件、それらとデータファイルとの対応関係、そして冒頭で述べた気づいたこと・感じたことのメモ・・・実に多岐に亘る。そして往々にして実験中は忙しく、文字通り「心に余裕が亡い」ので、狭いスペースにコンパクトに書き込もうとすれば、脳に余計な負荷がかかり、自分で読めない字を書き込んでしまったり、重要な情報が欠落したり・・・これを防ぐにはどうするか？ やっぱり「実験ノート」*1の類が必要になってくる。テキストの余白では到底足りない。

- Q. 記録と言われても何を記録すればいいのか・・・
A. レポートを書く時に必要なものから逆算しよう。何が必要か見通せなければ、見たこと聞いたこと全てについてメモ魔になるべし。最初は面倒だが、慣れてくれば整理できる。実験を始める前に、最低限記録すべき項目は予め列挙できるようになればしめたものである。
- Q. 実験を進めるのに精一杯で記録する余裕がない・・・
A. 他メンバーにメモを依頼し、一区切り付いたらその都度、自分の実験ノートに転写しよう。この過程で次に何を重点的に記録すべきか見えてくる。

*1 正式な「実験ノート」は紙の引き抜き・差し替えを行いにいよう作られ、各ページに日付などを記録する欄がある等、改竄を防ぐための配慮がされている。早い内からこれに馴れておくのも良いだろう。少なくとも専用のメモ用紙か、逐次書き込みできる電子ファイルは用意しておいた方が良い。